

香川大学教育学部 附属教育実践総合センターニュース

No. 41

平成 27 年 3 月 31 日発行

目次

特集 第 15 回 学部・附属学校園教員 合同研究集会を終えて	1-2	平成 26 年度 センター公開講演会報告	9
研究発表グループ報告	2-5	第 2 期 教育実践集中講座 実践報告	10
附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎 初等教育研究発表会報告	6	フレンドシップ事業 実施報告	10
附属坂出小学校 教科別授業研究会報告	7	センター活動報告・寄贈図書	11
第 59 回 附属幼稚園研究発表会報告	8	センターからのお知らせ	12
		教育実践総合研究(第 31 号)原稿募集	12

特集 第 15 回 学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて

【研究集会テーマ】教員養成の充実に向けた学部・大学院改革について
～新しい実地教育と教職支援の在り方～

副学部長 毛利 猛



平成 27 年 2 月 20 日(金)、梅のつぼみがほころぶ頃、第 15 回学部・附属学校園教員合同研究集会が教育学部 611 講義室・オーブスクエアを会場に総勢 179 名(学部 77 名、附属学校園 102 名)の参加を得て、盛大に開催されました。



全体会冒頭で山神眞一学部長からは、この合同研究集会において学部教員と附属教員が、学部・大学院改革に関する共通認識を深めることの意義は大きいことが述べられました。

本研究集会の総合司会は附属高松小学校の黒田拓志先生がされ、全体討論のコーディネーター役は私(副学部長 毛利)が務めました。

全体討論のテーマは、「新しい実地教育と教職支援の在り方」でした。実地教育の在り方と教職支援の在り方は、それぞれセンターの研究プロジェクトにおいて検討してきたテーマでもあります。全体討論では、まず、実地教育委員長の野崎武司先生から「学部・大学院の実地教育の在り方」について、続いて、教育実践総合センターの宮前義和先生と植田和也先生から「教職支援の在り方」について提案がありました。2つの提案を受けて、附属高松中学校の三野健先生と附属坂出小学校の篠原智子先生からの質問があり、それに対する提案者からの熱のこもった応答がありました。最後に、附属坂出中学校の小林理昭先生から閉会の挨拶をいただきました。

後半の分科会(個別発表・ポスター発表)では、13 題の共同研究プロジェクトの成果発表がありました。今回は、オーブスクエアの 2 会場を使って、ポスター発表が 12 題、プレゼン発表が 1 題という形式で行いましたが、いずれも充実した発表内容であり、学部教員と附属学校園教員相互の活発な意見交換がなされました。

その後、オーブスクエアに併設の学生会館(ソラミ)で行われた懇親会にも 91 名の参加があり、とても和やかで楽しい親睦のひとときでした。



教員養成の充実にとって、新しい実地教育と教職支援の在り方の模索は、とても重要な課題です。この合同研究集会で、学部教員と附属教員と一緒に、実地教育と教職支援の在り方をめぐって議論できたことは、大変意義深いことだと思います。今後も学部・研究科と附属学校園が互いに手を携えて、教員養成の一層の充実に努めていきたいという思いが伝わる合同研究集会でした。

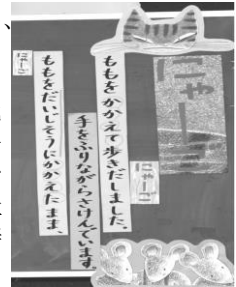


分科会(於：オリブスクエア)

研究発表グループ報告

①小学校・中学校における読むこと・書くことの習得が困難な児童・生徒に対する学習支援の方法についての研究 -比較思考に基づく限定発問についての研究- 佐藤明宏、附属特別支援、附属高松小・中、附属坂出小・中

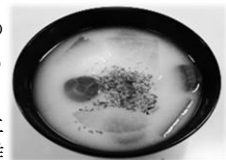
読むこと・書くことの言語力は国語科のみならず、全ての教科の基礎学力となる。そういう子どもたちに、これらの学習基礎力となる読むこと・書くことの学力を保障するための指導方法を開発していこうと考え、これまで4年間の継続研究に取り組んできた。本年は、特別支援を必要とする子どもの言葉の力を伸ばす方法としての発問の研究に取り組むことにした。発問の中には多くの創造性を求める曖昧な発問もあるが、特別支援を必要とする子どもにとってはそういう発問は難しい。そこで考えているのが、比較思考に基づく選択的限定発問である。AかBか、或いは、Aと書くべきところがなぜBか、というような明確な比較思考に基づく発問を工夫することにより、特別支援を必要とする子どものみならず、全ての子どもにより分かりやすい授業ができるのではないかと仮説を立て、研究を進めてきた。これらの研究成果は、全国の公立学校での同等の問題を抱える児童に対する指導方法の改善に寄与すると考える。



②郷土料理に重点を置いた中学校技術・家庭科の授業開発

加藤みゆき、附属坂出中

中学校技術・家庭科の学習指導要領に準じて、香川県の郷土料理を用いた授業内容を検討した。平成25年度の香川県における郷土料理のアンケート及び附属坂出中学校の生徒のアンケートの結果、代表する郷土料理はしょうゆ豆、うどん、まんぼのけんちゃん、あん餅雑煮、しっぽくうどんなどが挙げられた。その結果、香川県の特産物や郷土料理の季節性を考えたものとして、「まんぼのけんちゃん」「あん餅雑煮」「しっぽくうどん」を提案した。これらの授業は、学習指導要領の実習のねらいや基礎基本の調理方法を多く取り入れられた教材であることも実証した。同研究集会当日のポスター発表では、香川県の郷土料理に関する質問などがあつた。



あん餅雑煮



まんぼのけんちゃん



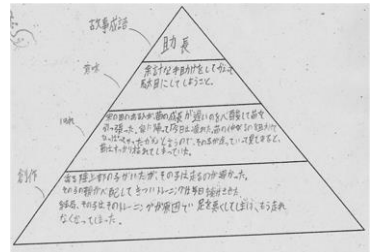
しっぽくうどん

③中学校国語科における思考ツールを使った説明的な文章の授業の実践的研究

山本茂喜、附属坂出中

我々はこれまで継続して、ビジュアル・ツールを活用した国語学習のあり方について実践研究を行ってきた。その成果として昨年の3月には、『魔法の「ストーリーマップ」で国語の授業をつくる』（東洋館出版社）を公刊し、広く世に問うことができた。

今年度は、ピラミッドやベン図などの思考ツールを活用した説明文指導の方法について共同研究を行った。その成果をもとに、本年夏には、東洋館出版社より『ビジュアル・ツールで思考力を育てる』（仮題）を公刊する予定である。これまでのご支援に深く感謝する次第である。また、研究集会当日は貴重なご意見・ご質問をいただくことができた。来年度以降もさらに共同研究を深化させていきたいと思っている。



④異学年集団における児童と教師の発話パターンの変化プロセスの検討

岡田 涼、附属高松小

附属高松小学校では、平成25年度より文部科学省研究開発学校の指定を受け、新たな教育課程の開発に取り組んでいる。そのなかで、新領域として『創造活動』が提案され、同学年集団と異学年集団という多様な他者集団との相互作用を活かした教育実践を行っている。本研究では、異学年集団である縦割り学級における児童と教師の発話がどのようなパターンを示すかについて観察データから検討した。発話パターンを分析したところ、伝統的な教師による発問、児童の応答、教師の評価といった相互作用だけでなく、児童によって発話が始まり、他の児童がそれを広げ、教師がそれを価値づけていくような児童による主体的な発話のあり方が見られた。



⑤知的障害特別支援学校中学部における主体的な「参加」を高める三つの視点を基にした授業づくりの提案

坂井 聡、附属特別支援

毎朝取り組んでいる日常生活の指導(掃除、朝の会)を対象とし、生徒が活動に目的意識をもち、仲間と共によりよく取り組むための授業改善の方法を探ることを目的とした。

授業実践を通じて、掃除の開始時に活動のポイントや目標を確かめる場面を設けること、達成基準を明確にするための手順書の工夫、自分や仲間と共に振り返り・評価をするための工夫など、授業展開や支援方法の工夫を明らかにすることができた。

⑥知的障害の児童の主体的な態度を養う授業づくりの取組
～「チャレンジタイム」を通して～

武蔵博文、附属特別支援

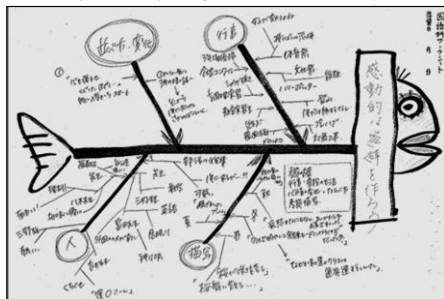
附属特別支援学校小学部では、学習や活動に主体的に取り組もうとする態度を養うため、様々な授業改善に取り組んでいる。本研究では、「チャレンジタイム」という特設の学習時間を対象に、児童が個々の課題に向かって自立的・主体的に活動できるための支援について、実践を通じて検討を行った。児童が課題への目的意識をもてるための手だて、自立して課題を遂行できるための手だて、また課題への達成感を味わえるための振り返りや評価の手だてを工夫することで、児童がそれぞれその子どもなりの主体性をもって活動に取り組んでいる様子を発表した。



⑦思考ツールを活用した文学教材の指導法についての研究

山本茂喜、附属高松中

今年度は、フィッシュボーンやベン図などの思考ツールを活用した国語学習の方法について共同研究を行った。その成果をもとに、本年夏には、東洋館出版社より研究成果(山本茂喜編『ビジュアル・ツールで思考力を育てる』(仮題))を公刊する予定である。これまでのご協力に深く感謝する次第である。また、研究集会当日は貴重なご意見・ご質問をいただくことができた。来年度以降もさらに共同研究を深化させていきたいと思っている。



⑧数学科における生徒の認知的個性を活かす学習指導

風間喜美江、附属坂出中

認知的個性とは、様々な認知的な能力やスタイルなどの個人差を包括的にとらえ直す個性の新たな概念である。研究は、『継次処理タイプ、同時処理タイプの数学的な内容と生徒の理解・受容に着目した視点』に焦点化し、数学的な内容と生徒の理解・受容に着目し、調査問題4題を実施(各学年1クラス)し、生徒の視点から分析・考察をした。

【問題例】図2は、あるロボットがAの位置から出発して、Pの位置にたどり着くまでの動きを示したものです。このロボットのCからPまでの動きを、言葉でわかりやすく説明してください。ただし、あなたの説明を読む人はA～Cまでのロボットの動きの図3しかもっていないものとします。

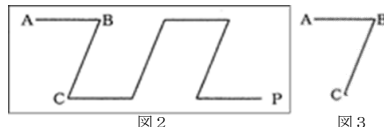


図2

図3

この問題では学年進行とともに「同時処理タイプ」が多くなった。また、どの問題も学年進行とともに、「同時処理タイプ」が増加する傾向にあることが判明した。個々の生徒の思考のタイプに視点をおき、両タイプを活かす生かす指導を課題としたい。

⑨プロジェクションマッピングを用いた情報教材の開発

宮崎英二、附属高松中、附属坂出中

本研究では、最近急速に普及してきたプロジェクションマッピングを題材として中学校技術の制御・プログラミングを学習する教材を試作した。素材自体は大きな視覚的インパクトを持つため、生徒の興味・関心を持たす事は可能であると考えられる。

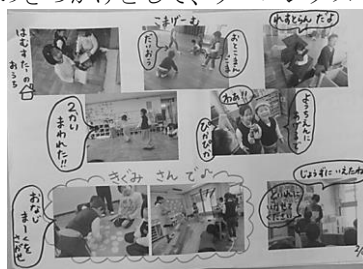
当日の研究集会においては、パネルを用いたディスカッションに加えて、本研究で試作した実際のプロジェクションマッピングを表示するプログラムのデモを行った。その結果、附属学校の先生方から、プログラムに関して幾つかの改良を行えば、技術教育以外(小学校における生活科の授業等)にも応用が見込めるとのアドバイスを頂き、教材としての可能性が示された。



⑩「遊びの質の高まり」を支えるアセスメントモデルの検討

松本博雄、附属幼稚園、高松園舎

これまでの「遊びの質」に関する共同研究の成果を踏まえて、今年度は、子どもたち自身が自らの遊びを振り返り、遊びの質を高めていくためのきっかけとして、ラーニングストーリーを援用してのアクションリサーチを試みた。子どもたちは、保育室に掲示されたラーニングストーリー(〇〇ぐみしんぶん)に対して、関心を持つ、熱中する、他者とコミュニケーションを図る姿を見せた。また、ラーニングストーリーを作成することにより、保育者も子どもの遊びに対する視点を自覚し、見通しをもった働きかけが可能になることを見出した。今後、他のクラスにおいても実践を試み、両園において研究を継続していきたいと考えている。



5歳児 あおぐみしんぶん

⑪幼稚園児保護者への朝食指導とその効果

藤元恭子、附属幼稚園

幼児にとって食は成長期の発達を支える重要なものである。しかし、食育が盛んになったとはいえ、十分な成果が見られているとは言い難い。そこで、本研究では、幼稚園児の保護者に対して行ってきたこれまでの食育指導を、間接的なプリント配布による指導から、今年度直接講話という形で行った結果、野菜類、タンパク源いずれも摂取増加がみられ、一定の成果をあげることが出来た。しかし、すべての問題が改善されたわけではないため、今後もの継続的に保護者が取り組み易い方策を考えていくことが必要である。

当日は、たくさんの有益なご意見をうかがうことが出来た。今後に生かしていきたいと考える。



⑫語り合う中で自己の「ものがたり」をつむぐ NIESD 授業の開発

伊藤裕康、附属坂出中

情報消費社会下の人間形成からみた学校教育の課題に、子どものアイデンティティ形成の機会や場の準備がある。我々は、マス・メディアを有力な手がかりとして社会・歴史的な文脈を参照し、アイデンティティ形成を図る。代表的なマス・メディアである新聞を上手に活用して社会・歴史的な文脈を参照し、アイデンティティ形成を図ることが求められる。NIESD は、Newspaper in Education for Sustainable Development (「持続可能な開発のための教育に新聞を」と、Narrative in Education for Sustainable Development (「持続可能な開発のための教育の物語」)の二つを含意した伊藤の造語である。附属坂出中学校では、全教科で NIESD による授業を展開している。研究集会当日は、「9教科で実践している点が評価できる。」「理科の原発に対する賛否では、子どもがどれほど当事者性を持てるかが難しい。原発は賛成、でも自分の近隣は嫌だ、ではいけない。」をいただいた。NIESD は緒についたところであり、今後とも研究を深めていきたい。



⑬技術科教育法・内容学演習における現職教員と学生との協働

黒田 勉、附属高松中、附属坂出中

技術科教育法・内容学演習における学生との協働の実例として、本学部学生が協働作業として参加した技術科教員自主研修会「ねじ会」の概要を説明すると共に、参加した学生の実際行った作業等を紹介した。他教科や附属小学校の教員から実例についての詳細な質問を受け、作業や、受講した学生の進路の志望の変化について詳細に回答を行った。



分科会 会場点描



附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎「初等教育研究発表会」報告

香川大学教育学部 附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎

2月5、6日に開催した「初等教育研究発表会」には全国から多くの方々にご参会いただき、盛会裏のうちに終了することができました。学部の先生方には、ご指導・ご助言をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。また、学生の皆さんにも協力していただきました。ありがとうございました。

【附属高松小学校】

本校は、昨年度より文部科学省研究開発学校の指定を受け、テーマを「分かち合い、共に未来を創造する子どもの育成」とし、研究を進めてまいりました。「分かち合い」とは、学習の主体としての子どもが、自らをメタ認知しながら、共に生きていく他者と互いの見方・考え方に共感し、認め合うことであり、その過程で、共に学ぶ価値を実感していくと考えています。つまり、なりたいたい自分を心に描き、自分にとっての問題を認識し、仲間と共に試行錯誤しながら積極的に問題を解決していこうとする中で、自信をもち、主体的に「ひと・もの・こと」に働きかけることだといえます。

また、テーマにある「未来」とは、これから訪れる時を意味するだけでなく、子どもたちが今現在の中でもつ自己の見方・考え方を様々な価値観をもつ人々との関わりによって、よりよくしていくことであり、夢や希望をもって自己の生き方・在り方を創造していくことと捉えることができます。

そして、そのような目指す子ども像に向け、育みたい資質・能力として以下の3つを設定しました。

- 夢や憧れをもち、自律的に学び続ける力 ○「ひと・もの・こと」へ共感的・協同的に関わる力
 ○問題を解決し、知や価値を創造する力

更に、そこに向かうためのカリキュラムを「知を創造する教科学習」と「価値を創造する新領域『創造活動』」の2領域から構想することとしました。また、2領域で3つの資質・能力を育むために、子どもたちが主体的に学ぶことができる授業の在り方を検討し、3つの授業づくりの「しかけ」(志向・共感や協同・有用)の重要性も確認できました。

さて、初等教育研究発表会では、このような新カリキュラムに基づき、これからの社会を生き抜く子どもたちに必要な資質・能力を考え、目指す子ども像に向かう授業づくりについて検討することによって、教員の教育観・指導観が変容し、子どもやその事実に対する謙虚さや、授業に対する誠実さを学ぶ契機となりました。今後も、子ども主体の研究実践を基盤にしなが、新しいカリキュラムの創造に取り組んでまいります。



縦割り集団で共感的に問題解決する子どもの姿

【附属幼稚園高松園舎】



幼小交流「いっしょにわくわくつくろう！」

テーマ「能動性を発揮する保育環境の再考—遊びの中で心を動かせる子どもPART II—」のもと本園で実践してきた造形表現について「心を動かせる保育環境」を切り口に事例検討していきました。さらに、幼小交流活動についても「造形表現」を通して伝えあい、学びを深めていきました。研究会当日は、4・5歳児の保育および5歳児と1年生の幼小交流活動を公開しましたが、県内外から多数の参加者がありました。パネルディスカッションでは、子どもの表現物をどのような観点で保護者に見てもらおうか、描けない子どもにどう関わるかなど教師の援助について議論し、参会者からも活発な意見がよせられました。

附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎では、教育の今日的課題を見据えつつ、明日の教育の在り方を実践的視点から検討し研究を続けると共に、実践を通して提案していきたいと考えています。今後とも、ご助言・ご支援の程、よろしくお願いたします。

附属坂出小学校 教科別授業研究会報告

香川大学教育学部 附属坂出小学校

<研究主題>

対話を通じた「思考力」の育成

－「育てるカウンセリング」を生かして、個々の考えを広げ深める授業づくり－

1 研究会の概略

平成27年1月25日(日)、31日(土)、2月1日(日)の3日間にわたり教科別授業研究会を開催いたしました。1日目に算数科・理科・生活科、2日目に国語科・音楽科・図画工作科・家庭科、3日目に体育科・社会科の計17の授業を公開いたしました。休日にもかかわらず、県内外から延べ約750名の方々をご参会くださいました。「土日開催であったため、今回初めて参加できた」「いつもより、多くの授業を見ることができてよかった」等の声がありました。耐震工事に伴い例年とは異なる運営となりましたが、プラス面も少なからず感じることができた研究会でした。



【2日目 第1学年 国語科】

2 研究主題について



【対話する子どもたち】

一人ひとりが教材に向き合い、じっくりと考える。「思考力」育成には、欠かせない時間です。それとともに、他者と向き合い考えを広げ深める時間も大切です。学習集団における対話を通して「思考力」を育成する、それが本校が目指している授業です。その際、私たちは、子どもどうしの関わりをよりよいものにする「育てるカウンセリング」を生かして、この思考へと向かう対話を促進しようとしています。

3 成果と今後の方向

ご参会の方々より、「自校でも、『思考力』を明確に位置付けて、話し合いをさせていきたい」「『育てるカウンセリング』の考え方は、今の学校の現状に合った必要な支援だと思った」等のご意見をいただきました。また、次年度に向けたご示唆も多くいただきました。まだまだ授業づくりにおける課題は山積しております。次年度もこの研究テーマを継続し、全職員で「対話」をしながら、より有効な支援の在り方を明らかにして参ります。



【全体で考えを深め合う】

第 59 回 附属幼稚園研究発表会報告

研究主題 幼児教育の質を高める計画と実践の在り方を考えるⅢ ～主体性と協同性の視点～

香川大学教育学部 附属幼稚園

1月30日(金)に第59回附属幼稚園研究大会を開催し、雨天にもかかわらず県内外から約250名のご参会をいただき、盛会に終えることができた。附属幼稚園では、質の高い保育を「一人一人が主体性・協同性を発揮できる生活づくり」と考えている。今年度は3年次として、新しく作成した指導計画を生かしながら保育を実践する中で、子どもの主体性に着目し、一人一人の育ちの基盤となる主体性と協同性のつながりを考えて研究を進めてきた。

【公開保育の様子】

独楽遊び



独楽の回り方を試す子どもたち。友だちから学び合う姿を大切にし、じっくり試行錯誤できるように。

ずも



体ごと友だちを感じながら、力いっぱい遊ぶ。異年齢の交流が見られ、互いの力も思いも感じ合えるように。

思い思いの積み木、レールがつながり、電車を走らせる。友だちと遊ぶ楽しさを体と心で実感できるように。



電車走るよ

≪日程・内容≫

- 9:00～10:50 公開保育
- 11:10～12:00 全体会
～開会式・研究経過報告～
- 13:00～14:10 分科会
協議テーマ
「主体性と協同性のつながりを
どうとらえ、育んでいくか」
- 14:30～ 講演
文部科学省初等中等教育局
視学官 津金 美智子先生
「質の高い幼児期の教育を考える
－主体性と協同性の視点から－」

やってみようかと心動かす遊びを友だちとさらに楽しくおもしろいものへと創り出すこと、また難しさを一緒に解決していくこと、自分、人、もの・こととしっかりかかわり合う中で生み出される幼児期ならではの「学び」を大切にしたい保育実践をめざして。

1. 研究内容

(1) 指導計画に基づいた保育実践を通して、子どもの「主体性」を見取り、探る。

1、2年次の研究から、協同性の育ちの中に主体性が大きな意味をもつことを理解していた。しかし、これまでより深く、一人一人の心の内について探ることで、一人一人が「人」「もの・こと」とのかかわりの中で「自分」とのかかわりが明らかになるのではないかと考え、子どもの主体性を見取り、探っていくことにした。また、子どもの主体性を見取った上で、協同性とのつながりについて、さらに研究を進めた。

(2) 子どもの主体性を促す教師の援助について探る

子どもの主体性を一人一人の内面からとらえるとき、その思いや考えをどのように見取っていくか、子ども自らが生き生きと自分をあらわしていくためにどのような援助が適切であるのかを見極めていくことが教師に求められる。そこで、教師の子どもの内面を見取り、またその見取りからつないでいく援助について探ってきた。

2. 成果と課題

【主体性のとらえの見直し】

環境に自ら向かおうとする姿、その内面にも主体性が働いている。それを感じ取り見極めた上で、一人一人に添った援助を考えることが育ちへとつながる。

【主体性と協同性は絡み合って育つ】

発達段階により、また、人、もの・こととのかかわりの過程の段階により、主体性と協同性の絡み合いは異なるが、互いに影響し合う関係であり、高め合うものである。

【今後の課題】

子どもの育ちを支える豊かな体験は、多様性と関連性を生むものであることを再確認した上で、その学びの過程について、さらに明らかにしていきたい。

平成 26 年度 センター公開講演会報告

(本年度第 1 回公開講演会は台風のため中止となり、同内容にて第 3 回公開講演会を開催しました。)

第 2 回

一人ひとりの子どもが生きる教育を考える ～「独特の思想と表現をする卓越した子ども」を手がかりに～

講師：九州大学大学院人間環境学研究院 教授 田上 哲 先生

第 2 回公開講演会が、平成 26 年 12 月 13 日（土）14:00～16:30 の時間帯に開催されました。当日は、幼稚園、小・中・高等学校教諭、県教委、県教育センター、本学教員、院生・学生など、約 50 名の方が参加されました。

講演前半では、ギフテッド研究の内外の状況・研究動向についてお話しいただいた。「こだわり」と「とらわれ」のことばの比較から問題が説き起こされ、本来は対象である客体が主人公になっている「とらわれ」が、子どもたちの中に広がっているとの指摘がありました。その後、「卓越」（ギフテッド）研究の米国の動向及び日本での展開について紹介がありました。それらを踏まえ、一人ひとりの子どもが生きる教育を考えていく上で、「ものごとや人をやや斜めから捉えること」（本質を見抜くこと）の必要性が提起されました。

後半は、「教育実践から考える」というテーマで、学習指導場面、学級経営・生徒指導場面、さらに評価についての具体的な事例が示され、前半の講演内容と関連付けながら、一人ひとりの子どもが生きる教育を保障するための課題について検討されました。

おわりに、マジョリティとマイノリティとの比較検討を通し、「例外」をいかに捉えて教育実践を構想していくか、また、子どもたち一人ひとりが自己をどう個性的に統一して確立していくかが重要になるとの提起で締められました。（文責：山岸知幸）



第 3 回

すばらしき郷土 香川の魅力と教育

講師：前・香川県教育委員会教育長 細松 英正 様

平成 26 年度 研究交流会・第 3 回公開講演会が、香川大学教育学部附属教育実践総合センターと松楠会との共催として、平成 27 年 2 月 7 日午後、香川大学の新施設「オーリー・スクエア」で開催されました。この会は 8 月上旬に当初は予定されていましたが、台風のためやむを得ず中止となり、その後、多数の方から実現へのエールと支えにより、半年経ての実現の運びとなりました。

研究交流会は初めての試みであり、「香川大学教育学部と香川県の教育」のテーマのもと、シンポジウムと講演が催されました。当日は、小・中学校や附属学校園教員、県内教育関係者、教育関係機関の関係者、本学教員、松楠会会員だけでなく、本学の院生・学生も参加があり、参加者 100 名、センター教職員やシンポジスト等合わせて 115 名の会場満席状態となり、大盛況でした。

シンポジウムに先立ち、はじめまして交流として、参加者が互いに出会いのあいさつを通して交流しようと 15 分程度の方も用意されていました。実際に学部生と現職の教員や松楠会の先輩の皆様と交流する場面を通じて、笑顔があふれ楽しい会話の機会となっていたようです。

シンポジウム 1 では、「香川の魅力を歴史から」と題して、前高松市立紫雲中学校校長の日詰裕雄氏にコーディネートをお願いしました。特に「新版 香川の歴史ものがたり」の内容や執筆での苦労話も交えて、大変熱く多彩な話題が提供されました。フロアからも質問や郷土香川の魅力に関して意見等も活発に出されました。

シンポジウム 2 では、「道徳の教科化をめぐる～若年教員の道徳授業力向上～」と題して、七條正典実践センター長がコーディネートを務めました。特に、教育改革の話題でもある「道徳の教科化」に関して様々な視点から話題提供や質疑がなされました。実際に新規採用教員の方も参加して熱心に聴く姿が印象的でした。

講演は、研究交流会の歴史と道徳教育に関するシンポジウムを受けての位置づけでした。講師の前香川県教育委員会教育長の細松英正様から、「すばらしき郷土香川の魅力と教育」と題して、香川の教育の現状に関して、大変広い視点と深い洞察力で分かりやすく整理して話をいただきました。聴講者のアンケートからも大変高い満足とともに、今回の企画に対して賞賛の声をいただきました。講演内容は、まず、教育長 6 年間の教育行政をふり返りながら、不易と流行や教育力評価の 3 要素などのユーモアを交えて話されました。続いて、道徳についてのご自身の思いや新版「香川の歴史ものがたり」についての思いもふれられました。各々の話題に関して、具体的な事例等を示しながら話されたので、参加者も香川の教育の現状や今後の課題に関して、重要なポイントを伺うことができ有用な講演会となりました。

開催のためにご尽力いただきました関係各位の皆様から心より深謝申し上げ、来年度の第 2 回研究交流会の構想に一步進めたいと思います。（文責：植田和也）



「はじめまして交流」のひとつコマ



第2期(10～3月)教育実践集中講座 実践報告

プロ教師とは何か? ～教師になるあなたへのエール～

附属教育実践総合センター客員教授 松井 保・藤本泰雄・山内秀則

第2期集中講座では、主に教職実践演習の講義を活用して、教師になるプロセスにおいて、その時機に必要とされる内容を、それぞれの学年に応じて次の通りに講義・演習を行いました。

【第1回】10月24日(金)【教育課題の探究】 「いじめと体罰」(松井) 「教員としての倫理観」(藤本)	【第2回】10月29日(水)【教育実習事後指導】 「教育実習を振り返って」シンポジウム 「教育実習を振り返って」助言(松井・山内)
【第3回】11月10日(月)【教職理解】 「教職を知る 教職の魅力」(藤本)	【第4回】11月28日(金)【校種別選択実務研修】 「はばたけ若き力を生かして～4月からの心がまえ～」 中学校(松井)・小学校(藤本)
【第5回】12月 1日(月)【道徳教育】 「子どもの心を耕す道徳の授業」(山内)	【第6回】12月 8日(月)【道徳教育】 「教育活動の『要』としての道徳教育」(松井)
【第7回】12月18日(木)【生徒指導】 「望ましい人間関係づくりと生徒指導」(山内)	【第8回】 2月17日(火)【卒業前直前対策】 「4月からの心がまえ」(藤本)
【第9回】 3月18日(水)【卒業前直前対策】 個別相談(藤本)	

このうち、卒業を3月に控え、もうまもなく教師としての第一歩を記す4年生を対象にした第1・4回の教職実践演習では、附属教育実践センターや教育学部の教員はもちろんのこと、受講生のいる経済学部や農学部、医学部の教員が共に指導にあたる光景は、オール香川大学の一気団結した体制を見ることができ大変心強く思いました。また、その指導方法も工夫されたものであり、学生にとっては受講した内容はもちろんのこと、こうした多様な授業形態も今後の教師生活に大いに役立つものになったことでしょう。

道徳教育については、道徳の時間の教科化に伴い配慮すべき点が多くあります。また、複雑化・多様化する社会を生きる子どもたちにとって生徒指導の重要性は増してきています。これらは教師の、子どもの範となる大人の、基本として身につけておくべきことであると認識して、社会に出て欲しいと思います。

4月から教壇に立つ香川大学から巣立つ若い教師たちが、崇高な使命を担っていることを深く自覚し、子ども一人一人をしっかりと見つめ、理解しようと努めながら、生き生きと歩んでくれることを切に願います。

平成26年度 フレンドシップ事業 実施報告

平成26年度「教育実践基礎演習(フレンドシップ事業)」は、42名の受講生の参加を得て行われました。本事業は、学校教育の場である学校から離れた野外において、子どもたちとふれあう様々な活動体験を通して、子どもの気持ちや行動を理解し、教育実践のための実践的指導力の基礎を身に付けることを目的として実施しています。本年度の主な活動は、以下のとおりです。

■事前研修：5月21日(水)

野外教育の意義、ならびに野外教育体験活動の日程・内容、また参加及び引率に際しての諸注意等についての講話を聴く。

■野外教育体験活動 指導者講習会

：五色台少年自然センター：5月24日(土)～25日(日)

■野外教育体験活動

- A 附属坂出小学校：屋島少年自然の家 : 7月1日(火)～2日(水)
B 高松市立栗林小学校：屋島少年自然の家 : 9月26日(金)～27日(土)
(A・Bいずれかを選択し、野外教育体験活動における児童への補助活動を行う。)

■野外教育体験シンポジウム：7月23日(水)

野外教育体験活動の振り返り・課題共有、成果と課題について協議し助言を得る。



本年度当初、野外教育体験活動Bは7月に予定されていましたが、台風のため9月実施となりました。Bを選択した受講生は野外教育体験活動より先にシンポジウムに参加することとなりましたが、Aを選択した受講生の反省や課題を事前に聞く場としたことで、Bを選択した学生からも「心構えや予測を立ててのぞむことができたので結果として良かった」「次に生かしていけるような内容となっていてよかった。」などの声を聞くことができました。このほか受講生に対する質問紙調査の自由記述には「この活動の経験を通して、以前よりもっと魅力的に感じた『教師』という職を目指したいと思った」「教師という仕事の魅力ばかりではなく、大変さも体感することができて良かったと思う。悩み始めるきっかけとなった。」などがあり、学生たちにとって本事業が、子どもたちとの接し方などに悩みながらも、受講生相互に課題意識を高め合い、教職に対する熱意の基礎を形成する契機となっていることがうかがえます。(文責：松下幸司)

教育実践総合センター 活動報告 (2014/10~2015/03)

2014年 10月 20日 (月)	第六回 専任会議
10月 22日 (水)	教育実践演習 第六回全体指導 教育実践プレ演習 第四回全体指導
10月 23日 (木)	第二回 研究プロジェクト②会合
10月 24日 (金)	教育実践集中講座 (第二期 1回目)
10月 29日 (水)	教育実践演習 第七回全体指導 教育実践集中講座 (第二期 2回目)
11月 10日 (月)	教育実践集中講座 (第二期 3回目)
11月 17日 (月)	第七回 専任会議
11月 19日 (水)	第三回 フレンドシップ実施専門委員会
11月 27日 (木)	第三回 研究プロジェクト①会合
11月 28日 (金)	教育実践集中講座 (第二期 4回目)
12月 1日 (月)	教育実践集中講座 (第二期 5回目)
12月 5日 (金)	第二回 管理委員会
12月 8日 (月)	教育実践集中講座 (第二期 6回目)
12月 10日 (水)	第三回 編集会議
12月 13日 (土)	第二回 公開講演会
12月 15日 (月)	第八回 専任会議
12月 18日 (木)	教育実践集中講座 (第二期 7回目) 第三回 研究プロジェクト②会合
2015年 1月 7日 (水)	第四回 編集会議
1月 19日 (月)	第九回 専任会議
2月 7日 (土)	研究交流会・第三回公開講演会
2月 13日 (金)	第86回 国立大学教育実践研究関連センター協議会
2月 16日 (月)	第十回 専任会議
2月 17日 (火)	教育実践集中講座 (第二期 8回目)
2月 20日 (金)	第15回 学部・附属学校園教員合同研究集会
3月 5日 (木)	第三回 管理委員会
3月 10日 (火)	第二回 企画推進委員会
3月 16日 (月)	第十一回 専任会議
3月 18日 (水)	教育実践集中講座 (第二期 9回目)

寄贈図書 (2014/10~2015/03)

琉球大学教育学部 発達支援教育実践センター紀要 第5号 2013	琉球大学教育学部 附属発達支援教育実践センター
島根大学 教育臨床総合研究 2014 Vol.13	島根大学教育学部附属教育支援センター
教育実践総合センター レポート 第34号 2014年10月	大分大学教育福祉学部 附属教育実践総合センター
教育実践研究 第40号 平成26年10月	金沢大学人間社会学域学校教育学類 附属教育実践支援センター
横浜国立大学大学院 教育学研究科 教育相談・支援総合センター研究論文 第14号 2014年	国立大学法人 横浜国立大学
富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究	富山大学人間発達科学部 附属人間発達科学研究実践総合センター
鳴門教育大学 学校教育研究紀要 No.29	鳴門教育大学 地域連携センター
福井大学教育実践研究 一第39号一 2014	福井大学教育地域科学部 附属教育実践総合センター
鹿児島大学教育学部 教育実践研究紀要 第24巻 2015	鹿児島大学教育学部 附属教育実践総合センター
東京学芸大学 教育実践研究支援センター紀要 第11集 2015年3月	東京学芸大学教育実践研究支援センター
香川県五色台少年自然センター自然科学館 研究報告 第40号 2015	香川県立五色台少年自然センター 自然科学館
国立特別支援教育総合研究所 研究紀要 第42巻 平成27年3月	独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所
山形大学 教職・教育実践研究 第10号 2015年3月	山形大学地域教育文化学部 附属教職研究総合センター
中等教育研究紀要 第61号 2014	広島大学附属中・高等学校
中等教育研究開発室年報 第28号 2014年度	広島大学附属中・高等学校 中等教育研究開発室

【センターからのお知らせ】

2015年4月1日、当センターが **変わります！**

平成27年(2015年)4月、香川大学教育学部改革と併せて、本センター「香川大学教育学部附属教育実践総合センター」は名称を「香川大学教育学部附属教職支援開発センター」と改め、①実地教育推進部門、②教職支援推進部門、③教育開発推進部門の3部門において、それぞれ事業を推進することになりました。

改組の詳細につきましては、名称を改めた次号センターニュースにてお知らせする予定です。今後とも何とぞよろしくお願い申し上げます。

(詳細につきましては、当センターホームページもご覧ください。)

4月1日、銘板除幕式を行う予定です。



教育実践総合研究(第31号)原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第31号は、**5月29日(金)**原稿受付締切です。
以下投稿要領をご参照の上、奮ってご投稿ください。

香川大学教育実践総合研究 投稿要領

1 (投稿の要領)

香川大学教育実践総合研究(以下「教育実践総合研究」という。)への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる。

2 (投稿の内容)

教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料(研究ノート、研究動向の紹介など)及び香川大学教育学部附属教職支援開発センターの活動報告などを掲載する。

3 (投稿者)

教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議(以下、「会議」という。)が特に依頼した者とする。

4 (投稿原稿の提出方法)

投稿原稿は、完成原稿とし、原則として電子文書で作成し、印刷原稿2部と、その電子ファイルを会議に提出する。

5 (投稿原稿の長さ)

投稿原稿の長さは、刷り上がり14頁(1頁は21字×42行×2段)以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。

6 (刷り上がり1頁目の形式)

刷り上がり1頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属(所在地)、和文要旨(200字)及びキーワード(5語)を含むものとする。

7 (投稿原稿の取り扱い)

投稿された論文等は査読を行い、会議においてその取り扱いを次のいずれかに決定する。

査読者については、会議において決定する。

- (1) 採録
- (2) 条件つき採録
- (3) 返戻

8 (校正)

校正は原則として3校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。

その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附則

本要領は、平成16年4月1日から適用する。

附則

本要領は、平成17年12月14日から施行し、平成17年11月9日から適用する。

附則

本要領は、平成19年4月1日から施行する。

附則

本要領は、平成27年4月1日から施行する。



咲き誇る 未来に向けて

香川大学教育学部附属教育実践総合センターニュース (No. 41)

発行日 平成27年3月31日

編集発行 香川大学教育学部附属教育実践総合センター 代表者 七條 正典

URL <http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/> E-mail jcen@ed.kagawa-u.ac.jp

〒760-8522 高松市幸町1-1 Tel. 087-832-1683 Fax. 087-832-1689